

【目的】被服を選択する時は、眺めるだけでなく身体にあてたり着用して、着装イメージや似合うかどうかを判断している。本研究では、単色の色彩感・嗜好・着装選択について、布のみを見た場合と着装した場合の相違を、色相やトーンとの関連で検討した。

【方法】試料布はカラーブロード、色相は修正マンセル10色相・ピンク・茶、トーンはpale(p)・light(lt)・vivid(v)・dark(dk)の4種類、無彩色5種類を加え、計38色とした。布は、無彩色→黄→緑、青→紫、赤→無彩色の3グループに分けて、ランダムに提示した。調査Ⅰ(布提示)：単色布(タテ25×ヨコ33cm、灰色台紙に1枚ずつ添付)を見て、12項目をSD法5段階評定させた。調査Ⅱ(着装)：単色布(タテ50×ヨコ60cm)を1枚ずつ胸に掛け、鏡の自分について10項目をSD法5段階評定させた。被験者に服色の影響を避けるため灰色長袖エプロン(N7)を着用させた。被験者は大学生男女45名、調査は1999年7～9月午前中に教室及び実験室(北窓)で実施した。単純集計、因子分析などにより解析した。

【結果】vトーンの布提示では好きな色と似合う色の評定は青が高く、紫は低い。着装では青と赤の評定が高かった。青は布提示の方が着装より好まれ、紫は着装の方が高かった。布提示では「活動性」が優先して評価され、着装では「嗜好」が優先される傾向であった。トーン別ではdkトーンが好まれる傾向にあった。